

# 世界に誇る腹中カメラ



「腹中カメラ・グループ」の面々が撮影の成果を東大分院外科医長林田健男助教授に報告している 左から宇治副手 林田医長 杉浦技師 深海技師 今井研究員

胃粘膜を詳細に、しかも自由自在に撮影するという、世界に誇り得るカメラを完成した四人の若き「腹中カメラ・グループ」は東大医学部雑司ヶ谷附属病院外科、宇治達郎副手（三一）今井光之助研究員（二五）と、オリンパス光学研究所の杉浦睦夫（三二）深海正治（三〇）の両技師である。ここで注目すべきことはこのグループが腹中カメラの完成に着手したのは、いまから三年前、いずれも二十代の年齢であったことだ。二十代のモラルが云々されている時、ギャバジン風潮に見向きもせず、このように真摯に、

黙々と世界的研究にはげんでいる二十代の学徒のあることを見落してはならない。心強い限りである。

胃ガンや、胃カイヨウが難病の中に数えられるのは早期発見が困難なところに最大の原因がある。つまり外部からハッキリ診断が出来ないからだ。これを克服するためにカメラによって胃粘膜をキャッチしようということは、早くから世界医学界の懸案であった。その記録が始めて文献に現われたのは一九二九年、ウィーン大学の O. Porzes と J. Heilpern の両教授によってである。宇治副手が「腹中カメラ」に着目したのはこの文献によってであるが、しかし、どんな方法で、どんな構造のカメラか、その詳細ははっきりしていない。

宇治副手は、オリンパス光学研究所の杉浦、深海両技師の協力を得て、種々の基礎実験を終え、漸く第一回の試作品にまで漕ぎつけたのは昨年（昭和二十四年）の二月、第二回が五月、この第二回の試作品を完成した時、米ライフ誌上に「腹中カメラ」の写真が掲載され「やられた」と思った。しかしこれはレンズなしのピンホール・カメラで、しかも一回のフラッシュで十六枚の写真を撮るもので、映像も鮮明ではなく、このグループが作っているものと比較すれば、問題にならないものであった。「それが解ってホッとしましたよ」と四人は笑っていたが、続いて今年の八月に第三回、

いずれも犬を実験台にして改良を加え、遂に第四回の試作品から人体実験に入り、精巧な「腹中カメラ」による胃粘膜撮影は完成されたのである。（中略）

レントゲン透視や、胃鏡では発見出来ないガン、カイヨウがはっきりキャッチ出来る。難症になる以前の胃ガン、胃カイヨウの早期発見に画期的な成果が期待される。